

膝の痛みにお悩みの方へ

変形性膝関節症の治療法として期待されている再生医療とは？

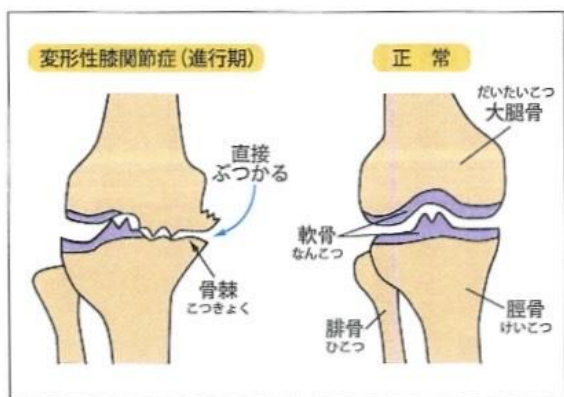
加齢とともに多くの方が悩む膝の痛み。その原因の一つである変形性膝関節症の新たな治療選択肢として再生医療が期待されています。再生医療の方法や効果にはどのようなものがあるのでしょうか。東京医療センターの藤田貴也先生にお話を伺いました。

変形性膝関節症はどんな病気ですか。

膝関節にある軟骨がすり減り、骨の変形によって痛みや違和感が生じる疾患です。高齢になればなるほど有病率が高いいわれていきます。主な原因として体重過多や加齢があげられますが、外傷などで靭帯が損傷したり半月板が膝の内側に逸脱したりすることによって膝関節が不安定になり変形性膝関節症へ発展するケースもあります。

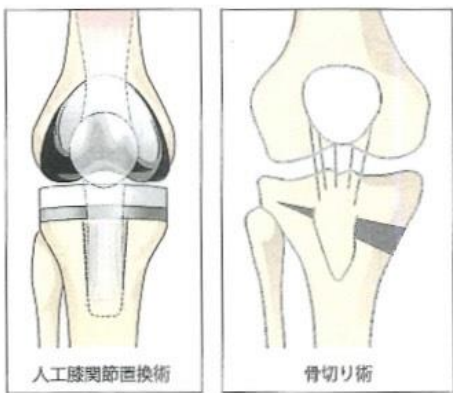
変形性膝関節症は進行性の疾患です。生活の中で膝に痛みや違和感があれば早めに整

整形外科へ相談するようにしましょう。



治療にはどのような方法がありますか。

初期の治療では貼り薬や飲み薬で痛みを抑え、太ももの筋力をつけるための筋肉トレーニングを行います。さらに進行してくると、関節内のヒアルロン酸注射も併せて行うことが多いです。これらの場合や痛みで生活に困っている場合は、骨切り術や人工膝関節置換術などの手術も選択肢となります。

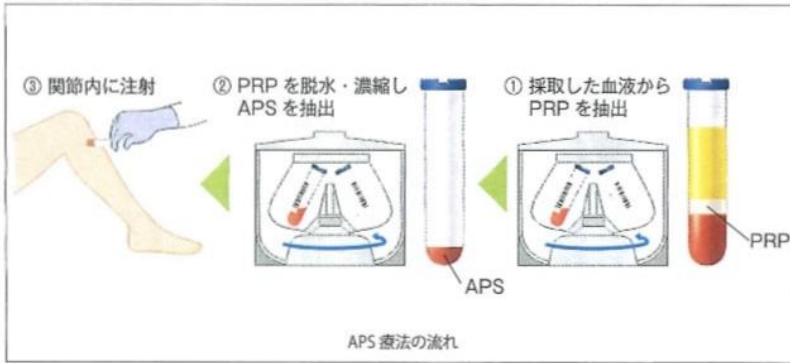


しかし、中には保存療法で効果がみられなかったけれど手術をするにはまだ年齢が低すぎるという方や、仕事や家庭の都合で手術をする時間がとれないという方がいらっしやいます。そのような場合に保存療法と手術の間をつなぐ治療選択肢として再生医療が注目されています。

再生医療はどのような治療ですか。

整形外科で受けられる再生医療にはPRP療法やAPSS療法、培養幹細胞治療などがあります。これらは厚生労働省の許可を得た施設だけが実施できる治療です。保険適用外の治療ですので費用は施設によって異なります。PRP療法では患者さんご自身の血液を遠心分離機にかけ、血小板を多く含む血液成分であるPRPを抽出し関節内に注射します。このPRPをさらに遠心分離し、脱水させた成分

一方、培養幹細胞治療は、自身の脂肪組織を採取し、そ



を関節内に注入するのがAPS療法です。採血をしたその日のうちに患部への注入が終わり、APSには成長因子や炎症を抑制する成分が高濃度に含まれており、関節内の炎症のバランスが調整され、痛みを軽減を期待できます。

あなたの膝は大丈夫？

このリストは診断を目的としていません。これらの症状を持っていても必ずしも変形性膝関節症であるとは限りません。

変形性膝関節症の主な症状



- 膝がはれる
- 歩きはじめるときに痛い
- 正座がしづらい
- 膝の内側を押すと痛い
- 和式トイレがづらい
- 立ち上がるときに痛い
- 30分以上歩くと膝が痛い
- 階段の上がり、下がりときに痛い
- 膝を動かすとギシギシ音がする
- 過去に膝の怪我で医師にかかったことがある

再生医療はまだ変形が軽度で軟骨が残っている初期のほうで効果を発揮するとされています。しかし、実際には変形が進んでしまい手術適用になる少し前の段階で再生医療が選択肢に入ってくる人が多いですね。人工膝関節置換術は、人工関節の耐用年数から60〜70歳代以降が適用年齢といわれています。50〜60歳

検討されていますか。

再生医療はまだまだ変形が軽度で軟骨が残っている初期のほうで効果を発揮するとされています。しかし、実際には変形が進んでしまい手術適用になる少し前の段階で再生医療が選択肢に入ってくる人が多いですね。人工膝関節置換術は、人工関節の耐用年数から60〜70歳代以降が適用年齢といわれています。50〜60歳

効果の感じ方や持続期間には個人差があります。PRP療法やAPS療法の場合は、早い方だと数日後から徐々に効果を実感できることがあります。培養幹細胞治療の場合は、培養に約6週間かかります。

治療後の効果について教えてください。

これらの治療はご自身の組織を利用するため、過剰な免疫反応が起こる心配はほとんどありませんが、持病などがあると医師の判断で治療を受けられない場合もあります。



藤田 貴也 先生

独立行政法人国立病院機構
東京医療センター
整形外科医長
人工関節・再生医療センター長

その後患部に注入して早い方で約3ヶ月後から効果を感じ始めるケースがあります。効果はいずれも永続的に続くものではありませんが、培養幹細胞治療は比較的長い持続が期待されています。

変形性膝関節症には幅広い治療選択肢があります。痛みの原因がわからなければ不安が膨らむと思います。治療には保存療法から手術、そして近年では保険適用外にはなりますが再生医療という選択肢もあります。ご自身の膝がどのような状態なのか、どのような治療方法があるのか、まずは整形外科へご相談ください。

